

平成 18 年度 修士課程学位論文要旨

リハビリテーション病院における

摂食嚥下能力に関連する要因と看護ケアの実態

学位の種類： 修士（看護学）

保健科学研究科 看護学 専攻 学籍番号 045109

氏名：樋浦裕里

（指導教員名：河原加代子教授）

【目的】

リハビリテーション病院における摂食嚥下能力に関連する要因と、摂食嚥下に関する看護ケアの実態を明らかにする。

【方法】

3ヶ所のリハビリテーション病院（100床以上）に入院中の患者とその担当看護師を対象とした。調査期間は、2005年7月から9月で、研究者作成の自記式調査票による調査を実施した。質問紙は患者と担当看護師を一組とし、質問内容は、摂食嚥下機能評価として①大熊らの開発した摂食嚥下機能評価尺度（15項目）②食に対する満足感（1項目）③食物形態（3項目）④摂食嚥下に関する看護ケア（7項目）⑤基本属性である。

【結果および考察】

420組に協力を依頼し、322組から回答を得て286組の有効回答（88.8%）であった。

1) 対象者の属性

男性165人、女性121人、平均年齢66.1歳（±12.7）、主要疾患の8割が脳血管疾患であった。

2) 各変数と摂食嚥下能力得点との関係

①食物形態と摂食嚥下能力得点に有意差が認められた（ $\chi^2=30.44$, $p<0.001$ ）。摂食嚥下能力の低下に伴って食物形態が工夫される傾向にあり、摂食嚥下能力に応じた食事提供の実態が明らかとなった。

②看護ケアの実施の有無と摂食嚥下機能得点では、咽頭期のケアである「姿勢修正」（ $U=7081.00$, $p<0.05$ ）、「速度修正」（ $U=4109.00$, $p<0.01$ ）、「麻痺側配慮」（ $U=5847.00$, $p<0.01$ ）、「一口量配慮」（ $U=3681.00$, $p<0.001$ ）、「口腔内残留配慮」（ $U=3545.50$, $p<0.001$ ）に有意差が認められた。咽頭期の機能低下に対応した看護ケアの実態が明らかとなった。認知期のケアである「配膳修正」「姿勢修正」は、咽頭期のケアに比べて高い頻度で実施されている傾向が示された。本研究の対象集団である脳血管障害者の特徴に対応したケアと考えられた。

③食事の満足感と摂食嚥下能力得点に有意差が認められた（ $U=3987.00$, $p<0.05$ ）。摂食嚥下能力の低下に伴って食事をおいしいと感じない傾向が明らかとなった。

【結論】

- 1) 咽頭期のケアである「速度修正」「麻痺側配慮」「一口量配慮」「口腔内残留配慮」「姿勢修正」において、患者の摂食嚥下能力に応じた看護ケアが実施されていることが明らかとなった。
- 2) 「配膳修正」「姿勢修正」の看護ケアを実施している割合は、他の看護ケア5項目に比べて高く、脳血管疾患の高次脳機能障害に対応したケアの特徴と考えられた。
- 3) 食物形態と摂食嚥下能力得点との関係に有意差が認められたことから、摂食嚥下能力に応じた食物形態が選択されていることが確認された。